最初に云つた如く本書は主として想像に依る推論で實證すべき材料が乏しい。且人口の減少と云ふことは、經濟に對しては、土地及自然の富源の如き人爲的に如何ともし難きものに對する關係を除いては兩樣の影響を及すが故に、それは何れが如何程大きいかと云ふ、分量の問題を測定して、差引何れが大きいかと云ふ事を定めなければならない。然るに經濟現象に於て將來の事に對し、その分量迄推定するが如きは殆んど不可能である。人口と失業との問題に關聯して常に繰り返さるゝ事であるが、人は一つの口と共に二本の手を以つて生れる。二本の手が一つの口を養つて餘りあれば、人口增加によつて生活は樂となり、國は富み、人口減少に依つて生活は苦しく、國は貧する。反之、二本の手が一つの口を養ふに困難を感ずる情況ならば影響はその反對である。本著の結論は人口減少の結果は二本の手は暇にならうが、暮しは樂になると云ふにあるやうである。唯最後に著者は國防上の必要と云ふものが一切の斯くの如き平和經濟の理論に頓着なく人口增加を極めて緊密ならしめて居ると云つて居るが、今、洋の東西何れを見渡しても、軍事政治的の情勢は、極めて接迫して、本著の如き經濟論を閑問題と見えしめるの感さへある。

（北岡　壽逸）

朝鮮農村社會衞生調査會編

「朝鮮の農村衞生」

―慶尙南道蔚山邑達里の社會衞生學的調査―

內地外地を問はず農村に對する各方面の關心は相當積極的な要求として現はれてゐる現狀ではあるが、これに應ずるには一般論的な研究か、或は概括的な說明に終るものが比較的多い。基本的な材料として提供されるものは左程數多く發表されてゐるやうに思はれない。特に科學の各分野より克明に問題の穿鑿に當ることは、非常に地味な仕事であるだけに簡單なやうで容易に果されるものではない。而もそれは一つの科學的知識だけではどうにもならず、一農村の固有の性格を把握する爲には他の科學的知識をも充分併用することによつて突止めねばならない。從つて農村の調査研究に當つて學問的な協同作業の重要性は今更云ふまでもないことである。

このやうな意味で、「朝鮮の農村衞生」を極めて興味深く讀むことができた。別題に示す通り、慶尙南道の農村達里に關する社會衞生學的調査であるが、その序に記されてゐる如くたとへそれが本調査の目的からは第二義的なものであつても經濟調査と相俟つて、極めて重要なる意味を發揮してゐるからである。

これは昭和十一年七月より八月にかけて四、五十日間に亙り、醫學生其の他十二名より成る調査團が現地の農村に滯在して勇敢にして眞摯なる科學のメスを振つた結晶である。

全編は七編より成り經濟調査として發表されてゐる部分は第一編のみであるが、こゝに於ては第二編以下の調査に先行して、研究方向の基準となるべき達里の農民層を土地所有の關係、營農上の諸條件から全調査農家一二七戸に付上中下層の三段に分類し、次編以下の調査の指標としてゐる。

第二編食糧と榮養、第三編住宅に就いて右の分類より夫々の相違を說明し、特に食糧は上層より下層に赴くにつれて急激に自給量が低下し、全消費量が遞減してゐるのみでなく、食糧不足の場合購入量より地主からの借

入量が多いために、これが又零細農をあくまで土地に縛り付ける原因となるといふ朝鮮農村の土地關係の樣相を窺へる。

第四編は人口である。農村家族の質的構成、家族構成員數、性別年齡別構成の問題を扱ひ、上層の家族構成は下層に比して人員が多いのみでなく稍〻複雜であり、妻の平均年齡が家長たる夫のそれより高いといふ點に朝鮮の上層農家の特徴を見出してゐる。これは下層農家に於ては複雜なる構成と人員とを保持する經濟的基礎を缺くことを示すのであり、出稼ぎが多く而も世帶主、又は長男に於て多く行はれてゐる事實によつて知る。

家族員に於ても家族構成に關しても所謂大家族的色彩のないことを强調し、而も最近家族員の漸次減少してゐるのは何れも出稼ぎに由るものであるといふ。

第五編より醫學的調査に入るのであるが、婦人及乳幼兒の問題と流産、早産、死産、死亡に關する調査は前編の人口と關聯して我々には特に多くの問題を與へてゐる。

朝鮮は元來早婚であるかの如く云はれ、家族制度竝に人口現象上の一特徴を示すものと考へられてゐる向きもあるが、こゝではかゝる早婚說誤謬の資料を提供してゐる譯である。然し早婚の年齡をどこに取るかをしかく簡單に云ひ得るか疑問であるばかりでなく、本調査に依つて與へられる事實のみで朝鮮一般を直ちに推論するには可成り無理があるやうに思ふ。而もこの材料では內地のそれと比較して必ずしも早婚でないとも云へない。

初婚年齡で特に興味をひくのは、生活條件の相違が兩性の婚姻年齡を逆にし、男子は上層に於て低く下層に隨ひ高く、女子は下層に於ては低く上層に行くに隨ひ上昇してゐる事である。卽ち玆でも生活の窮迫のため女子は若くして嫁出し、男子は容易に家庭を持つ機會に惠まれないと云へる。これが又妊娠にどう關係を持つかを見ると、下層程妊娠率が低く、早婚者は晩婚者よりも低いといふ現象を呈してゐる。

達里の如き農村に於ては妊娠といふ生理的現象に人爲的な制限が考へられぬとすれば、下層程妊娠率の低下してゐる原因を生活條件の高低に由ると考へていゝであらう。

流産、早産、死産、死亡が妊娠の回數と如何なる關係を持つかを調べてみると、五回以上の妊娠に於ては出生兒の死亡率は急激に昂まり、而も四回以下の場合と比較すれば下層程高くなつてゐる。流早死産率も妊娠回數と平行して高くなる。妊娠間隔は生活條件の低下につれて延びる事實が示されてゐる。

一般に乳兒死亡は極めて高いが、殊に早期死亡に於て階層別の差異を明かになし得ないのは、母の出産前の生活狀態が胎兒に與へる影響よりも、出産後の非衞生なる環境に左右される所が大きいからであるといふ。

更に第六編體格と發育、第七編疾病の調査がある。

以上本書の大略を紹介した。このやうな調査は學生の仕事としては可成り突飛なものであつたかも知れず、そのため多少の懸念ももたれたやうである。然し參加者の熱意と眞摯な科學的態度とは我々に多くの示唆を與へ問題を提供してくれた。加之、澁澤氏の跋文に云はれる如く達里農民と調査者の美しい理解と親しい接觸とは學問上の價値以外に尊いものを齎らしてくれたことを充分に想像できる。唯望蜀の要求かも知れないが達里の農村としての日常生活の實態が參加者以外のものに把握しきれない憾みがあるやうに思はれるのは、第一編の調査に更に多くの手を費す餘裕がなかつたためであらうか。（昭和十五年二月刊、岩波書店發行、菊判、二八八頁、定價二圓五〇錢）

（北山　正邦）